The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Ṛgveda X 128　Vihavya-Sūkta の展開

西　村　直　子

Veda 祭式は，祭主の依頼に応じる形で祭官によって挙行される．祭官は，祭主と神々との間の供物と願望成就の応酬を仲介する．祭式の議論は，元来は祭官階級の祭主を前提としたと想定される所があるが，インド・アーリヤ諸部族東漸の過程で王族の役割も増したものと考えられる[1]．祭主を巡る議論は，部族社会の基盤が祭官階級からそれ以外へと広がってゆく姿をも伝えている．また，祭式には神々を賓客とする接待儀礼的側面も見出される．神々が祭場に来なければ，その祭式は効力を持たない．この懸念は，複数の祭主が同時に同じ祭式を行う場合に生じる．Soma 祭では，競合する Soma 圧搾において自部族の勝利祈願の為に神々を競い招く mantra が，Saṁsava として整備された[2]．新月満月祭等の定期的祭式も，複数の祭主が同時に行うことになる．RV X 128 は部族間闘争を背景とし，競合する祭主達の姿を伝えるものと考えられる．本稿ではその位置づけと他学派における展開を跡付ける．特に YV 文献における受容伝承の比較検討により，以下の点が明らかになる：Maitrāyaṇīya 派は Agnyupasthāna 及び祭主の章において当該 Sūkta を専ら祭主の議論と関連づけるが，引用は第1詩節のみに留まる．Kaṭha 派は M 派同様祭主の議論に第1詩節を挙げ，更に全詩節を Soma 祭の mantra として伝承する．Taittirīya 派は M 及び K 派と祭主の章の論題を共有しながら，両派が採用する RV の詩節を挙げず，Soma 祭における Saṁsava の文脈でのみ当該 Sūkta に言及する．祭主との関連は M 派に，Soma 祭との関連は T 派において顕著である．K 派は両議論を兼備し，他2派と各々共有する．一方，Vājasaneyin 派は独立した祭主の章を持たず，Soma 祭の議論においても当該 Sūkta に言及しない．黒 YV 学派とは全く異なる立場を取る．これらの相違は後の Śrautasūtra 段階で平均化され，Veda 祭式の整備過程と祭主を巡る議論の展開の一端を辿ることができる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

1．RV X 128 と *vihava*「呼びかけ争い」

1[3]　効力は，Agni よ，諸々の（祭主達が競って行う）呼び掛け争いの中で，私のものであれ．我々は君を燃え立たせながら，自らの身を［今まさに］豊かにしたい．私に，4つの方位達は身をかがめよ．君を監視者として，諸々の争いに我々は勝利したい．
2　神々はすべて，呼び掛け争いにおいて，私のものであれ，Indra を伴って Marut 達は，Viṣṇu は，Agni は．中空は，広い世界は，私のものであれ．私の為に風は清まれ，この願望を巡って．　**3**　私のもとに，神々は動産を祭式によってもたらせ．私のもとに，祈願は（叶えられて）あれ．私のもとに神々への呼び掛けは［あれ］．神々に属するかつての Hotṛ 達は獲得しようとしている[4]．我々は自らの身に害を被ることなくありたい，良き勇者を持つ者達として．　**4**　私のために［神々］は称えよ，［何であれ］私によって献供されるべき物達を．意図は実現する，私の思考に属する（叶った）ものであれ．罪過に陥ることのないように，どんな［罪過］であれ，私が．あらゆる神々は我々に味方（口添え）せよ．　**5**　6人の幅広い女神達よ，［君達は］我々に広きものを作り為せ[5]．あらゆる神々は，ここで，勇者ぶりを奮え．我々が子孫から離れる（子孫を失う）ことのないように[6]，自らの身から［離れる］ことのないように．［我々を］憎んでいる者に，我々が屈服することのないように，王 Soma よ．　**6**　Agni よ，相手（敵対者）達の興奮を突き返しつつ，欺き得ない守り手として，取り囲んで守れ，我々を君は．逆を向いて戻って行け，敵[7]たち，彼らは．家で，当の者達の意図は，目覚めると，消え去る．　**7**　世界の主人であるところの，Dhātṛ（造り定める者）たちの中の Dhātṛ は，天に属する守護者（または：守護者たる神）を，呪いに打ち勝つ者として，この（現にある）祭式を，両 Aśvin は，Bṛhaspati は，神々は護れ，祭主を，凋落から．　**8**　広い広がり／領域を持つ水牛は我々に庇護を支え保つがよい，この呼びかけに際して，多くの者たちから呼びかけられる，多くの家畜を持つ［水牛］は．そういう者として，我々の子孫の為に，黄緑色の馬を持つ者よ，君は寛大であれ．Indra よ，君が我々に害を被らせることのないように．君が［我々を］見捨てることのないように．　**9**　我々の競争相手である者たち，彼らは離れよ．Indra と Agni と共に，我々は押し伏せる[8]，彼らを．Vasu 達は，Rudra 達は，Āditya 達は，私を上に手の届く者[9]と，力強い，意識ある者と，優れた王[10]と，［今まさに］為した．

hvā (*hav*^{i}) + *ví* の語義「呼びかけ争いをする」は，WEBER が Śunaḥśepa の物語に基づき検討している[11]．RV X 128 の *vihava-* は，現実に行われていた呼びかけ争いを背景とし，神々を巡って複数の祭主の間に起こる争いとして祭式の文脈に位置付けられたものと考えられる．同 Sūkta は AV 以降 “Vihavya” の名で呼ばれる．

2．他学派における伝承状況

2．1．Sūkta として全体を伝承するもの　本 Sūkta 全体のパラレルは以下の文献に見られる：AV V 3[12]~Paippalāda-Saṁhitā V 4[13]，Kaṭha-Saṁhitā XL 10^{m}~Taittirīya-

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Saṁhitā IV 7,14[m]. YV の 2 文献は Agnicayana 祭の mantra 章に収めるが，対応する brāhmaṇa には引用されない（→ 2.3.）．Śrautasūtra の対応箇所では第 1 詩節の pāda *a* を pratīka で引用し，Sūkta 全体の唱誦を規定する．これらの伝承には個々の詩節に variant がある他，詩節の追加，詩節順序の違いが見られる．RV と完全に一致する伝承は存在せず，何れの学派も独自の要素を持つ．詳細は割愛するが，これらの比較によって以下の 8 点が指摘される：(1) 全体の詩節数：RV 9 詩節<TS 10<AV = KS 11<AVP 14. (2) 何れの学派も RV の全 9 詩節を含み，更に詩節を追加．(3) RV と AV 及び AVP との間では，詩節の順序が大きく異なる．(4) AV と AVP とが各々追加する mantra は，殆ど一致しない．(5) 詩節順序の点から，YV は大筋で RV の系統を承けるものと思われるが，完全には一致しない．(6) 各詩行 (pāda) 間の異読においては，YV に AV 系と共通する要素が見られる．(7) KS が伝える全詩節は AV と対応するが，順序は異なる．(8) KS 及び TS の追加詩節は AV にパラレルを持つ．

表 1　RV と AV, AVP, KS, TS の詩節順序の相違

RV X 128	1	2	3	4	5	6	7	8	9	—	—	—	—	—	—
AV V 3	1	3	5	4	6	2	9	8	10	7	11[14]	—	—	—	—
AVP V 4							8	7	14	—	10[15]	9[16]	11	12	13
KS XL 10	①	②	③	④	⑦	⑤	⑥	⑧	⑩	⑨	⑪	—	—	—	—
TS IV 7,14					⑤	⑥	⑦		⑨	—	⑩	—	—	—	—

「—」は該当詩節を伝承していないことを示す[17]．KS 及び TS の番号は詩節順序を示す．

RV 以外の学派はそもそも RV とは異なる伝承を持っていたか，RV を改作した可能性がある．KS 及び TS の詩節が AV とほぼ一致する点を考慮すると，KS 及び TS における当該 Sūkta の伝承は，RV から直接ではなく AV を経て固定されたか，或いは AV と共通の源泉に基づくものと推測される．KS と TS とは YV 学派の中で当該 Sūkta に対し極めて似通った立場を取り，他の YV 学派（M 派と V 派）にはない源泉を共有していたか，一方が他方の伝承を改作した可能性が指摘される．

2．2．YV 学派における個別の詩節（ṛc）の mantra 集への採録，br. における引用　YV には第 1 及び第 9 詩節が独立の mantra として伝承される．それ以外の学派は個々の詩節を mantra 集に収録せず，br. においても引用しない[18]：第 1 詩節：祭主の章冒頭の mantra（MS I 4,1[m]～I 4,5[p]，KS IV 14[m]～XXXI 15[p]；→ 3.）；第 9 詩節：Sarvamedha（VS XXXIV 46 = VSK XXXIII 2,9，ŚB に引用なし）．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

2．3．*vihavyà-* の語によって（Sūkta に）言及するもの

2．3．1．mantra における *vihavyà-*　YV 文献に 2 例ある：① **MS** II 12,5:149,3^{m} [Agniciti] (*vihavyàḥ*) = **KS** XVIII 16:376,16^{m} (*vihávyaḥ*) ～ **TS** IV 1,7,2^{m} [Agnicayana] (*vihavyàḥ*) = **VS** XXVII 5 = **VSK** XXIX 1,5 (*vihavyàḥ*) ～ **AV** II 6,4 (*vihávyaḥ*). ② **MS** II 10,3:133,15^{m} [Agniciti] (*vihavyàḥ*) ～ **KS** XVIII 2 = **KapS** XXVIII 2 (*vihavyàḥ*) ～ **TS** IV 6,2,6^{m} *q* [Agnicayana] (*vihavyàḥ*) ～**VS** VIII 46 (ŚB IV 6,4,6) (*vihavyàḥ*) ～ **VSK** VIII 21,1 [Gavāmayana] (*vihávyaḥ*) (ŚBK V 7,4,4 が対応するが，VSK の引用はない)．何れも *vi-hvā* (*hav*^{i}) の gerundive「呼びかけ競われるべき」であると概ね解されるが[19]，アクセント位置によって *vihavá-* の派生語「呼びかけ争いに関する」(→ 2.3.2.) である可能性も否定できない．更に検討を要するが，RV X 128 との関連性は積極的には認められない．

2．3．2．brāhmaṇa における *vihavyà-*「呼びかけ争い (*vihavá-*) に関する」　MS は RV X 128 を Agnyupasthāna と関連させて独自に議論を展開させる．KS と TS は Soma 祭の文脈で同 Sūkta に関する伝承を共有し，その一部は Sāmaveda の文献にも共有される (→ ③)．TS は更に *vihavyà-* の由来を伝える．V 派は ŚB に他派と対応する議論を持たない．

① **MS I 5,7:75,5–8**^{p}[20] [Agnyupasthāna]: *prātár upasthéyó. 'dhiśrita unnīyámāne vā hástā ávanenijīta. tátra **vihavyàsya** cátasrā ṕco vadet prātar avanegé cátasraḥ. prātaravanegéna vā́ ánāptam āpnóty ánavaruddham ávarunddhe. tád ánāptam eváiténāpnóty; ánavaruddham ávarunddhe.* 朝に［祭火が］礼拝されるべきである．［乳が］火にかけられた時に，或いはくみ上げられている時に，自らの両手を洗い清めるべきである．その際，Vihavya (*vihavá-* に関する［Sūkta］) に属する 4 つの諸 ṛc を声に出して唱えるべきである，朝の手洗いの時に 4 つの［諸 ṛc］を．朝の手洗いによって，［祭主は］未だ獲得されていないものを獲得するのだ，未だ確保されていないものを確保する．その場合，未だ獲得されていないものを，［祭主は］これ（朝の祭火礼拝）[21] によって獲得することになる (antithetisch のアクセント)，未だ確保されていないものを確保する．② **MS I 5,12:81**,11–15^{p}[22] [Agnyupasthāna]: *yajñó-yajño vái sámṛchaté. 'thākasyavído*[23] *manyante. sóma evá sámṛchatā. íty agníṣomīyāyāḥ púrastād **vihavyàsya** cátasrā ṕco vaded. āgneyásya puroḍā́śasya dvé yājyānuvākyè kuryād. eténaivá havī́ṁṣy ā́sannāny abhímṛśed. vṛ́ṅktè 'nyásya yajñáṁ nā́syānyó yajñáṁ vṛ́ṅkte. sáyajño bhavaty áyajñā ítaraḥ.* それぞれの祭式はぶつかり合うのだ．何も知らない者達[24] は思う，「Soma［祭］だけがぶつかり合う」と．Agni と Soma とに対する［讃歌 *ṕc-* 或いは献供 *ā́huti-*］に先立ち，Vihavya に属する 4 つの諸 ṛc を声に出して唱えるべきである．Agni に対する puroḍāśa については，2 つの［ṛc］を yājyā 及び anuvākyā (献供前と献供時に Hotṛ 祭官が唱える ṛc) とすべきである．他ならぬこれを伴って，据えられた諸供物に触れるべきである．［祭主は］捻り取る，他者（競争相手）の祭式を．他

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

者は当人（祭主）の祭式を捻り取らない．［祭主は］祭式を伴った者となる．後者（競争相手）は祭式を持たない者［となる］．③［Gavāmayana, Prāyaścitta］**KS** XXXIV 4:38,11[p] ～**TS** VII 5,5,2[p] ～**PB** IX 4,13 ～**JB** I 344 *sajanyaṁ śasyaṃ.* ***vihavyaṁ*** *śasyam. agastyasya kayāśubhīyaṁ śasyam.* Sajanya (-Sūkta: RV I 32) が唱えられるべきである．Vihavya (-Sūkta) が唱えられるべきである．Agastya の Kayāśubhīya (-Sūkta: I 165) が唱えられるべきである．④ **TS** III 1,7,3[p]［Agniṣṭoma, 補遺］～**PB** IX 4,14［Gavāmayana, Prāyaścitta］*viśvāmitra-jamadagnī́ vásiṣṭhenāspardhetāṁ. sá etáj jamádagnir* ***vihavyàm*** *apaśyat. téna vái sá vásiṣṭhasyendriyáṃ vīryàm avṛ́nkta. yád* ***viyavyàṁ*** *śasyáta indriyám evá vīryàm yájamāno bhrā́tṛvyasya vṛ́nkte.* Viśvāmitra と Jamadagni は，Vasiṣṭha と争った．その際，この（例の）Vihavya (n.: *sūktá-*) を，J. は観得した．それを用いて，彼は Vas. の感官の力を，生命力を，捻り取った．Vihavya が唱えられるならば[25]，他ならぬ感官の力を，生命力を，祭主は競争相手から捻り取ることになる．④′ **TS** V 4,11,3–4[p]［Agnicayana, Vihavyā 煉瓦］：④と同様，Viśv. と J. が Vas. と争う話．J. は Vihavyā 煉瓦（*vihavyā̀s*, fem.: *íṣṭakā-*）を観得する．

3．YV 学派における展開——競合する祭式と祭主

3．1．祭主の章における RV X 128,1 の採用　祭主と RV X 128 との関連づけは，M 派，K 派では mantra 集の段階で明確に固定化され（MS I 4,1:47,1–2[m] = KS IV 14: 38,16–17[m] = RV X 128,1 → **1.**），「競合する祭式」の問題として提示される．T 派はトピックのみを共有し，Vihavya には言及しない．V 派は祭主の章を持たず，競合する祭式をも含め，祭主のあり方自体が独立した議論の対象とされていない．

MS I 4,5: 52,9–13[p] *samṛtayajñó vā́ eṣá yád darśapūrṇamāsáu. kásya vā́ha yakṣyámāṇasya devátā yajñám āgáchanti kásya vā ná bahūnā́ṁ samānám áhar yájamānānāṁ. yáḥ pūrvedyúr agníṃ gṛhṇā́ti sá śvó bhūté devátā abhíyajate. mámāgne várco vihavéṣv astv* (I 4,1: 47,1–2 pratīka) *íti. pū́rvam agníṃ gṛhṇāti. devátā vā́ etát pūrvedyúr agrahīt. tā́ḥ śvó bhūté 'bhíyajate.* 新満月祭であれば，これは，ぶつかり合った祭式なのだ．［祭主として］祭式を行おうとする誰の祭式には，一体，神格達がやって来るのか，或いはまた，誰の［祭式］には，［神格達］が［やって来］ないのか，同じ日に祭式を行いつつある多くの［祭主］達の中で．もし［祭主が］前日に Agni を摑むならば，彼は，翌日に神格達を対象として祭る．〈効力は，Agni よ，諸々の（祭主達が競って行う）呼び掛けの中で，私のものであれ．〈我々は君を燃え立たせながら，体を［今まさに］活気あるものと為したい．私に，4 つの方角達は身をかがめよ．君によって，監視者によって，諸々の争いに我々は勝ちたい〉〉と［唱える］．前もって Agni を摑む[26]．神格達を，このことによって，前日に摑んだことになるのだ．そういう［神格］達を対象として，翌日に，［祭主は］祭る．～ **KS** XXXI 15: 17,5–9[p] (Vihavya の第 1 詩節 IV 14 を pratīka で引用) ～ **TS** I 6,7[p]（mantra なし）．

3．2．Śrautasūtra における展開　br. の段階では Vihavya を祭主と関連づける議

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

論が見られなかったT派及びV派，Soma祭と関連付けなかったM派は，ŚrSū. 段階で各々の伝承の空白を補塡する．この点に，ŚrSū. における伝承の平均化，即ち学派を超えた祭式全体の整備，定式化の過程が認められる：T派：BaudhāyanaŚrSū XX 1:3,4–4,5［I 1:1,4–5，新月満月祭に対するDvaidhasūtra］ほか；V派：KātyāyanaŚrSū II 1,3［新月満月祭］；XXV 14,18［Prāyaścitta］；M派：MānavaŚrSū VI 2,6,2［Agnicayana, Vihavyā 煉瓦］.

1）Cf. 阪本（後藤）純子「王族とAgnihotra」（『印度学仏教学研究』53-2, 2005），西村直子『放牧と敷き草刈り』（東北大学出版会，2006），139ff.　2）Cf. Mylius, "Der saṁsava," *Wiss. Zeitschr. d. Univers. Halle-Wittenberg*, Reihe 17,6 (1968), 117–137 = Das altindische Opfer (Wichtrach, 2000), 38–70.　3）RV X 128,**1** *mámāgne várco* ***vihavéṣv*** *astu* | *vayáṃ tvéndhānās tanvàm puṣema* | *máhyaṃ namantām pradíśaś cátasras* | *tváyādhyakṣeṇa pṛtanā jayema* ||　**2** *máma devā́* ***vihavé*** *santu sárva* | *índravanto marúto víṣṇur agníḥ* | *mámāntárikṣam urúlokam astu* | *máhyaṃ vā́taḥ pavatāṃ kā́me asmín* ||　**3** *máyi devā́ dráviṇam ā́ yajantām* | *máyy āśír astu máyi devāhūtiḥ* | *dáivyā hótāro vanuṣanta pū́rvé* | *'riṣṭāḥ syāma tanvā́ suvī́rāḥ* ||　**4** *máhyaṃ yajantu máma yā́ni havyā́-* | *ā́kūtiḥ satyā́ mánaso me astu* | *éno mā́ ní gāṃ katamác canā́hám* | *víśve devāso ádhi vocatā naḥ* ||　**5** *dévīḥ ṣaḍ urvīr urú naḥ kṛṇota* | *víśve devāsa ihá vīrayadhvam* | *mā́ hāsmahi prajáyā mā́ tanū́bhir* | *mā́ radhāma dviṣaté soma rājan* ||　**6** *ágne manyúm pratinudán páreṣām* | *ádabdho gopā́ḥ pári pāhi nas tvám* | *pratyáñco yantu nigútaḥ púnas tè* | *'máiṣāṃ cittám prabúdhāṃ ví neśat* ||　**7** *dhātā́ dhātṝṇā́m bhúvanasya yás pátir* | *devā́ṃ trātā́ram abhimātiṣāhám* | *imā́ṃ yajñám aśvínobhā́ bṛ́haspátir* | *devā́ḥ pāntu yájamānaṃ nyarthā́t* ||　**8** *uruvyácā no mahiṣā́ḥ śárma yaṃsad* | *asmín háve puruhūtā́ḥ purukṣúḥ* | *sá naḥ prajā́yai haryaśva mṛḍay*$_a$*-* | *é*$_i$*ndra mā́ no rīriṣo mā́ párā dāḥ* ||　**9** *yé naḥ sapátnā ápa té bhavantv* | *indrāgnibhyām áva bādhāmahe tā́n* | *vásavo rudrā́ ādityā́ uparispṛ́śam m*$_ā$*-* | *o*$_u$*grā́ṃ céttāram adhirājám akran* ||

4）*vanuṣanta*: *van* 'gewinnen, überwältigen' の人工的な現在語幹 *vanuṣa-* の Inj.（事実上「かつて獲得しようとした」）と考えられる．Cf. Gotō, Morphology (2014), 126 n.279, I. Präs., 164. 更に Witzel-Gotō 695 (I 132,5 に対する注)，Narten, s-Aor., 235 n.712 をも参照せよ．

5）Cf. *uruṣyá-*^{ti}「広さを探し求める，人に広い場所（安全，自由）をもたらす」< *várivas-*「広さ」，Gotō, Morphology, 132.　6）*hāsmahi*: *hā* の s-Aor. Inj. AiS 131 は *prajáyā, tanū́bhir* を「分離」の Instr. として登録する（'möchten wir nicht um unsere Kinder und Leiber kommen'）.　7）*nigút-* の原義は「侮辱する者」と解される．Cf. Grassmann, s.v.; AiG II-2, 42; Scarlata 112 "Schmäher, Feid?"; Mayrhofer EWAia II 41, s.v. "*nieder-rufend, schmähend." 或いは，*pratyáñcas*「逆を向いて」*amā́*「家で」の語を考慮すると，「身内に (*ni*) 呼びかける (*gav*) 者達」か．　8）堂山英次郎「リグヴェーダにおける1人称接続法の研究」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』45-2, 2005），16に従い，直説法に解した．　9）Cf. Scarlata 666.　10）*adhirājá-*: AiG II-1 88,121, EWAia, s.v. *rā́j-* に従う．「王に従う者（＝祭官）」を謂う Bahuvrīhi の可能性もある（cf. Scarlata 451）.

11）"Ueber Haug's Aitareya Brâhmaṇa," Ind.St. IX (1865), 316–17: Die √hû (hve) + vi ist in

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

dem Brâhmaṇa-Styl solenn zur Bezeichnung des verschiedentlichen Anrufens (Umwerbens) Jemandes durch zwei sich um ihn streitende Parteien. バラモンの子 Ś. は，牛 100 頭と引き換えに犠牲獣として売られる．彼を売った実の父親 Ajīgarta は，更に牛 100 頭と引き換えにわが子を解体する役目まで引き受けようとする．Ś. は神々に援助を要請し，彼が唱えた讃歌の効力によって危機を免れる．Hotṛ 祭官を務める Viśvāmitra の膝に座った Ś. を見て，父親はわが子を取り戻そうとし，呼びかけ競争に発展する：*atha ha śunaḥśepo viśvāmitrasyāṅkam āsasāda. sa hovācājīgartaḥ sauyavasir ṛṣe punar me putraṃ dehīti. neti hovāca viśvāmitro devā vā imaṃ mahyam arāsateti . . . sa hovācājīgartaḥ sauyavasis tvaṃ v ehi.* ***vihvayāvahā*** *iti.* その時，Ś. は V. の膝に座った．すると，Sūyavasa の子 A. は言った，「詩人よ，私に息子を返せ」と．「否」と V. は言った，「神々がこの者を私に授けたのだ」と．（中略）すると，S. の子 A. は言った，「君は，では，来い．**我々 2 人は呼びかけ争いをしよう**」と．(AB VII 17,2–3 ~ ŚāṅkhŚrSū XV 24,1–19)　12) GopathaBr II 2,24［新満月祭］に言及あり．MS の Agnyupasthāna の議論と祭主の議論とを併せた内容となっている．→ 2.3.2., 3.1.　13) Cf. Lubotsky, Atharvaveda-Paippalāda Kāṇḍa Five (2002), 27ff.　14) パラレルが RVKhila X 128,1 にある，cf. Scheftelowitz, 112–13.　15) →注 14).　16) AV VII 86,1 にパラレルがある．　17) Sūkta 以外のパラレルについては Lubotsky, n.13 参照．　18) 個々の pāda には他にもパラレルがある．また，ŚrSū. 以降は各 pāda が他の mantra に組み込まれる形で YV 以外の学派にも採用されている．　19) 例えば ① の TS IV 1,7,2^{m} *e*, pāda d: *rā́jñām agne* ***vihávyo*** *dīdihīhí* "O Agni, shine forth here to be invoked by kings" (Keith TS tr.).　20) ~KS VII 5 ~KapS V 4 ~TS I 5,9. 何れも *vihavya-* への言及はない．　21) Amano, *Maitrāyaṇī Saṁhitā* I–II (2009), 185 は朝の手洗い (Morgenhändewaschen) を補う．　22) ~KS VII 10 ~KapS V 6 (~TS I 5,9). 何れにも *vihavya-* の語なし．　23) 当該箇所における「何も知らない者 (*akasyavíd-*)」は，競合する祭式について Soma 祭の文脈でのみ論じる者を謂うものと考えられる．T 派は専ら Soma 祭と関連づけて Vihavya に言及しており，MS 当該箇所はそのような T 派の議論を想定している可能性がある．(天野恭子氏の指摘による．)　24) →注 23).　25) PB IX 4,14 は Hotṛ 祭官による唱誦を明示．　26) *pū́rvam agníṃ gṛhṇāti. pū́rva-* には「前の，先頭の，第一の，早い，東の」等多用に解釈できるが，*pūrvedyúr*「前日に」との対応から，副詞と解釈した．本祭前日に諸祭火に焚き木をくべること (*anv-ā-dhā*) については，Hillebrandt, *Altindische Neu- und Vollmondsopfer* (1879), 2–3 参照．

略号，引用文献の書誌情報については以下を参照：
西村『放牧と敷き草刈り』，Gotō, Old Indo-Aryan Morphology (Wien: Verlag der Österreichische Akademie der Wissenschaften 2013).

(本研究は科学研究費補助金基盤研究 (C) による成果の一部である．(課題番号 24520048))

〈キーワード〉 リグヴェーダ，ヤジュルヴェーダ，ヴェーダ祭式，Vihavya，祭主

(東北大学非常勤講師)

NII-Electronic Library Service